



木下 隆利 (きのした たかとし)
1977年3月、名古屋工業大学大学院学
科繊維高分子工学修士課程修了。84年10月、
東京工業大学工学研究科にて学位(工学)取
得。2006年5月、名古屋工業大学副学長。
10年4月、国立大学法人名古屋工業大学理
事・副学長。20年4月より現職。

ハイレベルでも使ってもらえない技術は技術ではない 「人に寄り添う工学を」という信念が肝要です

——木下隆利名古屋工業大学長に聴く

「中京地域産業界との融合」を旗印に地域産業界の要望に対応し、課題解決や新しい価値創造に邁進すると同時に、有為な人材を輩出してきたこの地域唯一の国立工科系単科大学・名古屋工業大学。グローバル化を含めAI・IoTなど加速する科学技術進化のトップランナーとしての役割を果たす一方で、世界を覆う新型コロナ禍で大学もまた苛酷な状況にある。今年4月、学長に就任された木下隆利さんに話を聞いた。(聞き手/中部財界フォーラム社代表取締役塚本隆)

——まず抱負をお聞かせください。

木下 最近、科学とか工学技術に関連した指標、例えば論文数、サイテーションや国民一人当たりのGDPまで含めて、日本は世界の中で下がってきています。工学に携わる一人として危機感を持っています。新しい技術は大差なく創出されていますが、使ってもらえる技術は伸びていないのが実情。それを打開し、建て直していかないといけない、と強く思っています。「科学技術立国」と言いますが、レベルは高くても使ってもらえない技術は技術ではないとの認識の上で再スタートしないと日本の再生は出来ないと考えています。

修士課程の女性を助教として採用する新制度を創設

——厳しい現実認識ですね。

木下 世の中の人たちに使ってもらうために、心を使って工学しよう。頭を使うばかりでは研究者目線になってしまう。心で人に寄り添うのが工学である、を信念として教育・研究を推進すべし、と思っています。自分目線ではなく、社会から見てどうなのか、幸せと感じてもらうにはどうアプローチするか、180度転換する。図式はシンプルですが意識改革としては大きい。10年理事・副学長を経験して、大学改革の本質は教員の意識改革にあるのではないかと、と思っています。魅力ある大学とは魅力的